

「居づらい」という経験：その発生過程と特異性

石丸, ひかり
九州大学大学院人間環境学府

南, 博文
筑紫女学園大学

佐々木, 玲仁
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/7409204>

出版情報：九州大学心理学研究. 27, pp.43-51, 2026-03-05. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



「居づらい」という経験 ——その発生過程と特異性——

石丸ひかり 九州大学大学院人間環境学府
南 博文 筑紫女学園大学
佐々木玲仁 九州大学大学院人間環境学研究院

An examination of uncomfortable experiences – Regarding the generative process and characteristic aspects

Hikari Ishimaru (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Hirofumi Minami (*Chikushi Jogakuen University*)

Reiji Sasaki (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This study investigated how experiences marked by a sense of discomfort or situational unease come into being. The study also examined how the characteristic aspect, despite involving feelings of discomfort, is inherent within this generative process. A modified Grounded Theory Approach was employed, and data from semi-structured interviews conducted with seven university students were analyzed. The analysis was divided into a main analysis (six students) and a supplemental analysis (one student). Results indicated that feeling uncomfortable involves the realization of carrying a psychological burden, which is contingent upon recognizing differences in the self's and others' positions and engaging to adjust the situation. Furthermore, the unique aspect of daring to stay was found to manifest as passive acceptance of the uncomfortable experience in the main analysis, while the supplemental analysis suggested it stems from a deliberate choice.

Key Words: discomfort, dual structure of the setting, Modified Grounded Theory Approach (M-GTA)

I. 問題

1. はじめに

本研究は、日常生活の中で感じ取られる「居づらい」という経験について検討を行う。このような経験は対人的な場に「居る」ことで頻繁に発生するが、そこに「居る」ことに関する苦痛は容易に解消されない。その上、その場に居続けるという矛盾状態が持続し、それが当然のように認識される。なぜこのような苦痛は解消されないのだろうか。また、なぜ矛盾状態である「居づらい」という経験は我々に受け入れられているのだろうか。ここではこのような疑問に焦点を当て、「居づらい」という経験が発生していく過程を質的に検討する。

2. 「居づらい」という経験の様相と発生過程

「居づらい」という経験は、文字通りに捉えれば「居る」ことが容易くはない経験である。しかし、それはどのような状況であろうか。「居づらい」という経験が「居る」ことを前提に経験されるという着眼点から、まず「居る」ことに関する先行研究を整理する。

第一に、「居る」ことの本義について、辞典での記述に基づきながら解説したやまだ（2003, pp. 48-50）の主

張を取り上げる。やまだ（2003, pp. 48-50）は、「居る」こととは「動くものがある場所に留まって存在する、また、低い状態になる」ことが本義であるとしている。これには、動きの抑制や静的状態に価値を見出す心性が反映されている。また、身を低めることは相手を相対的に立てることを可能にし、本来「うごく」「目立つ」を意味する「立つ」という行為に比べ、共同体の中で制裁を受けにくい行為として価値が見出されている。

第二に、北山（2003, pp. 36）と阪本（2008, pp. 190）の主張を取り上げる。北山（2003, pp. 36）はウィニコットの理論から、「『居ること』の達成にはある程度の依存が成立せねばならない」とし、そのことによってのみ「居ること」すなわち「本当の自分」は出現させやすくなることを論じている。加えて阪本（2008, pp. 190）は、「くいまーここ」の現実がその都度具体的に開かれており、それによって、（自らの姿を鏡で映して確かめることもなしに）自らもその開けた場所に存在していることをごく当たり前に信じ、その場所の世界に没頭し、そこで展開されている様々な出来事と物事があるがままにやり過ごしていられる」ことを「居る」こととしている。つまり、「居る」ことは依存や受容の過程を含むと言える。

第三に、現象学的心理学を出発点に、「すること (doing)」「居ること (being)」への問いを臨床心理学的観点から検討した逸見 (2020) の主張を取り上げる。逸見 (2020) は、「居ること (being)」は、「すること (doing)」の対極に位置し「生きているだけでいい」ことを表す、としている。また、専門的な something の習得が「すること (doing)」を志向させ、「居る」ことの意味や価値を捨象していることを論じている。

以上の記述から、「居る」とは動かずとどまること (静止性)、あるいは依存し、そこでの展開を受け入れていくこと (受容性)、あるいは「すること」に支配されないこと (doing からの解放) であると言える。一方、ここに示したものは「居る」ことに関する局所的な主張であり、これらの条件が全て揃えば「居る」という行為が成立するわけではない。

さらにここから転じて、「居づらい」という経験はこれらが容易いとは言えない状態であり、静止性あるいは受容性、あるいは doing からの解放に困難が見られる状態であると推測する。しかし、ここに推測する「居づらい」という経験は、それがどのような有り様であるのかという様相を示しているのみで、その発生過程に関する記述ではない。「居づらい」という経験の理解には、それがどのような過程を経ているのかに関する検討が必要である。

3. 「居づらい」という経験の特異性

「居づらい」という経験は上述のように、静止性あるいは受容性、あるいは doing からの解放に困難を抱えた状態であると推測する。この様相から理解できるように、「居づらい」という経験は困難の保持を特徴とする。一方、人間は身体に何らかの不調が生じた場合に病院へ行き治療を求めるように、ある側面では不快感から逃れようとする存在である。人間がこのような向性を有しているならば、「居づらい」という経験は困難にあえてとどまる次元で特異的である。さらに、それが当然のものとして認識される点においても特異的である。

しかし、「居づらい」という経験が研究対象とされてこなかったため、この特異性の発現過程は明らかにされていない。特異性の理解においても、その発生過程の検討が必要である。

4. 「居づらい」という経験と「居る」という行為の関係

これまで繰り返してきた通り、「居づらい」という経験は「居る」ことが容易くない経験であり、静止性あるいは受容性、あるいは doing からの解放に困難を抱えた状態を指す。しかし、そもそも「居る」という行為は、日常生活の基盤となる主要な行為であるために意識されにくい行為である。一方、このような性質を有する「居

る」という行為は、「居づらい」という経験によって意識され始め、「居づらい」という経験を通して初めて取り扱い可能となる。つまり、「居づらい」という経験を扱うことは、「居る」ことを扱う一手がかりとなる。

「居る」ことが人間の当然の行為であるならば、「居る」ことが困難である「居づらい」という経験が研究対象とされていないことは、注視されるべきである。我々は「居る」ことを意識せずとも重視しているからこそ、「居づらい」という経験を通してその不快感を認知する。そしてここに、「居づらい」という経験を研究する意義は見出される。

5. 類似概念との関連と「居づらい」という経験の研究意義

場における不快感を扱う心理学的な研究では、類似概念として「心理的居場所感」のなさ、「気まずさ」、「居心地の悪さ」が挙げられる。「心理的居場所感」は「心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場」である「心理的居場所」があるという感情 (則定, 2008) を指し、その根底に「本来感」「役割感」「被受容感」「安心感」が想定されている (則定, 2007)。このことから、「心理的居場所感」のなさとは上記4感覚から心理的居場所の存在を感じられないことを指す。また、「気まずさ」は自閉スペクトラム症者と典型発達者の「気まずさ」に関する研究にて「一方の意図や雰囲気に対し、もう一方の気持ちや言動が適合せず『しっくりこない』と感じた場合に生まれる」感情と定義されている (滝浦・鈴木・田中, 2017)。さらに、「居心地」は「居場所」と重複しながらも、他者との相互関係を必須とせず「居場所」を感じる大前提としての包括的概念 (計良・大森・大木, 2022) とされている。このことから、「居心地の悪さ」は自己内感覚のみで発生し、「居場所」のなさを生起させる可能性を含む感覚であると言える。しかし、これらの概念は「心理的居場所感」のなさが「心理的居場所」の有無、「気まずさ」が場に存在する他者と共有する感情、「居心地の悪さ」が「居場所」に関わる概念とすれば、「居る」ことを前提とする「居づらい」という経験とは質の異なる、互いに独立した概念であると言える。つまり、「居づらい」という経験はこれらの概念を用いて説明することができないのである。この意味においても、「居づらい」という経験は検討意義を有すると考えられる。

II. 目的

「居づらい」という経験は、「居る」という行為が容易くなく、困難な局面にある経験を指す。これは、静止性あるいは受容性、あるいは doing からの解放に困難を抱

く様相を示すが、人間がある側面において困難を解決しようとする性質を有することからすれば不可解な経験である。また、その状態が当然なものとして認知される点においても特異的である。しかし、なぜ「居づらい」にも関わらず居続けるのか、その過程は明らかにされていない。

さらに、「居づらい」という経験を扱うことは意識することが困難な「居る」という行為を初めて取り扱い可能とし、「居る」という行為を扱う一手がかりとなる。また、「居る」という日常生活の基盤となる主要な行為が困難な状態である「居づらい」という経験を研究対象としていない現状は、注視されるべきである。加えて、類似概念によって説明できない点においても研究対象とする意義が見出される。

これらを踏まえ本研究は、「居づらい」という経験の発生過程を捉えることを目的とする。その上で「居づらい」という経験を「居る」ことについて苦痛を感じているにも関わらずその場に居続けてしまう経験と定義し、なぜ困難にとどまり続けてしまうのか、つまり「居づらい」という経験と「居る」という行為の関係を当事者はどのように捉え、居続けることがどのような経験として描かれているのかについて、経験の発生過程から捉えていく。

なお、「居づらい」という経験は、家庭で感じるもの、学校で感じるもの、ある一時的な場面で感じるもののように、場面や経験者の年代、継時的観点から様々な種類を想定可能である。一方、分類を超え「居づらい」という同じ言葉で表現されることからすれば、共通部分を有する一つの大きな経験であるとも言える。本研究はこの認識に基づき、全ての人間のあらゆる場面に通底する「居づらい」という経験への関心のもとに検討を行う。

Ⅲ. 方法

1. 協力者・データ収集方法

本研究は、特定の対象者・場面・期間を想定しない日常生活における「居づらい」という経験全般に共通する発生過程や性質の検討を目的とする。しかし、「居づらい」という経験が心理学分野にて扱われていないことから、研究開始の糸口としてある具体例が必要とされた。本研究では、その着眼点として理論的サンプリングにて大学生を抽出した。大学生は学業を主軸としつつ、空き時間に性質の異なる様々な場へ関与する自由度の高い側面を有し、「居づらい」という経験の前提となる「居る」という行為を様々な場面で経験する。そのため、様々な場に赴く大学生を対象とすることは、本研究への理解に繋がると予測した。

協力者はオンライン上にて募り、調査はA大学内の研究室にて大学生7名に対して行った。データは1対1形式・対面での半構造化面接にて収集した。面接は1人45～60分程度であり、協力者に録音機使用の了承を得て面接内容を記録した。質問項目はTable 1に示す。

2. 分析対象者

分析当初は全7名のデータを対象としたが、ある1名から生成概念に対応するデータ抽出が少なかったことから、経験内容の相異が明らかとなった。よって、データを6名と他1名に分類し、経験内容に重なるの多い6名に関する検討を主分析として中核的に扱った。他1名のデータについては、質が異なるという事由のみで未検討とすることは研究意義を損ねると判断し、「居づらい」という経験の理解を深めるための補足分析として扱った。

Table 1
半構造化面接における質問項目

1. これまでに「居づらさ」を感じたことがありますか
2. 「居づらい」と感じた時どのような気持ちになりましたか
3. そこに「居る」ことでどのような辛さや困難を感じますか
4. なぜ「居づらさ」を感じながらも「居る」ことを選びましたか
5. 「居づらい」ところに「居る」とどのような気持ちになりますか
6. もしその場や状況から離れていたらどうなっていたと思いますか
7. 過去に「居づらさ」を感じた時、「あの時〇〇だったら」と思ったことはありますか
8. 「居づらさ」を感じた時、その感覚はどのようになりますか
9. 「居づらさ」を感じた実際の場面以外で「居づらさ」の感覚はどうなりますか
10. 「居づらい」体験をした後、自分の時間をどのように過ごしますか
11. 「居づらさ」を感じている時と「居づらさ」を感じていない時の違いはありますか
12. 「居る」ことに対して自分が思い描く像のようなものはありますか
13. 「居づらさ」についてどう思いますか
14. この空間は居心地の良い空間だったでしょうか

3. 分析方法

3.1 分析手法

分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いた。M-GTA はデータが有している文脈性を破棄せず、逆にそれを重視し、意味の深い解釈を試みる方法である（木下, 2007, pp. 30-31）。また、そのために研究目的や問いの視点を明確化する【研究する人間】を重視する（木下, 2007, pp. 47）。さらに、研究対象がプロセスの特徴を持っている場合に適する分析方法とも解説されている（木下, 2007, pp. 67）。

本研究で扱う「居づらい」という経験は、これまで課題として明示されてこなかった新たな問題であり、研究目的が明確である。また、「居づらい」という経験は、「居る」ことに関する困難を抱え続ける意味で時間軸を持つ経験であり、プロセスを保持していると推測できる。このことから、本研究において M-GTA を用いることは妥当であると考えられる。

3.2 分析手順

(a) 分析テーマ・分析焦点者の設定：分析テーマとは、研究テーマに包括される詳細なテーマを指す（木下, 2003, pp. 131）。M-GTA では、概念生成においてデータを切片化せず、【研究する人間】の問題意識に基づき直接的に作業を行うため、分析の方向性を明確に提示する必要がある。また、分析焦点者とは、データ提供協力者を限定的に集団化したものを指す（木下, 2007, pp. 155）。M-GTA の分析対象は個人ではなく特定の集団であるため、分析焦点者の設定が必要である。これらを踏まえ、本研究では分析テーマを「居づらい」という経験の発生プロセスの研究、分析焦点者を「居づらい」という経験をする者と定めた。

(b) 逐語録の作成：半構造化面接にて収集したデータを録音に基づき逐語録に整理した。

(c) 分析ワークシートの作成と概念の生成：逐語録を基に、概念名、その定義、ヴァリエーション（具体例）、理論的メモからなる分析ワークシートを概念につき1つ作成した。概念は逐語録と分析テーマの関連に着目しながら徐々に生成し、立ち上げた概念に十分なヴァリエーションがない場合は概念の廃止、他概念への統合を検討した。

(d) 概念同士の関連検討とカテゴリーの生成：概念生成後、概念間の関連を検討した。また、概念のまとまりであるカテゴリーを生成した。1概念が1カテゴリーの場合もある。

(e) カテゴリー同士の関連検討と大カテゴリーの生成：カテゴリー間の関連を検討した。また、類似するカテゴリーがあれば、それを取りまとめる大カテゴリーを生成した。大カテゴリーは、それらがどのような関わりを持つのかを検討した後、結果として図でまとめた。

IV. 結果

1. 主分析

主分析は、経験内容に重なるの多い6名のデータを取り扱った分析である。

1.1 分析結果

主分析の結果、大カテゴリー4個、カテゴリー9個、概念21個が生成された。大カテゴリー間の関係性は Fig.1 に示し、以降【大カテゴリー】〔カテゴリー〕〈概念〉とする。



Fig.1

大カテゴリー間の関係

1.1.1 大カテゴリー【状態把握】

【状態把握】は、現在自分が置かれている状況を整理する段階を指す。下位には〔場に対する状態把握〕〔自己状態把握〕の2カテゴリーが成立し、これらは相互に関連し合う。

〔場に対する状態把握〕は、場との関係から現在自身が置かれた状況を把握していくカテゴリーである。下位概念として、その場での率直な違和感である〈率直な違和〉、その場にそぐわない感覚である〈場への不適応感〉、自己と他者の置かれた状況の差異を理解し、自己に比べ他者が優位な状況にあることを把握する〈他者優位性の把握〉の3点を含む。

〔自己状態把握〕は、過去を参照しながら現在自身が置かれた状況を把握していくカテゴリーである。下位概念として、居づらいと感じる自分について回想する〈居づらい自分〉、居づらいと感じない自分について回想する〈居づらくない自分〉の2点を含む。

1.1.2 大カテゴリー【選択】

【選択】は、その場にとどまり続けるか否かについて思案する段階を指す。下位には〔離脱への検討〕〔修正への検討〕〔残留の選択〕〔状態容認〕の4カテゴリーが成立し、これらは相互に関連し合い、検討され、最終的に残留が判断されることとなる。

〔離脱への検討〕は、その場から離れることを検討するカテゴリーである。下位に〈離脱正当性の理解〉が含まれ、これは場からの離脱は可能であることへの理解を示す。

〔修正への検討〕は、場を変化させることについて検討するカテゴリーである。下位に〈修正可能要素〉が含まれ、これは想定する場に近づけるための外的要素の有

無確認、またその実現性への思案を示す。ここでは自分以外のものを指すのであれば全て外的と表現される。

〔残留の選択〕は、その場への残留を検討し、それが選択されるカテゴリーである。下位に〈離脱力〉〈離脱リスク〉〈「居る」ことからの収穫〉の3概念が含まれる。〈離脱力〉は離脱を選択する際にエネルギーが生じることへの理解、〈離脱リスク〉はその場を不在にした際に被る悪評や相手が被る負担への理解、〈「居る」ことからの収穫〉はその場にとどまることによって得られる経験値や信頼性、人との関係性への理解を示す。

〔状態容認〕はその場にいることを容認するカテゴリーを指す。下位に〈居づらさの仕方なさ〉〈期待の非現実性〉〈他での居やすさ〉の3概念が含まれる。〈居づらさの仕方なさ〉は居づらさはやむを得ないという理解、〈期待の非現実性〉は状態改善期待は実現しないことへの理解、改善を求めない感情、〈他での居やすさ〉はその場以外の居心地の良さを示す。

1.1.3 大カテゴリー【「居る」への意図的没頭】

【「居る」への意図的没頭】は場に留まり、「居る」ことを意図的に実現させようとする段階を指す。下位には〔自己への行為〕〔場への行為〕の2カテゴリーが成立する。

〔自己への行為〕は、自分自身がその場に留まることを意味付けし、場への残留を納得しようとするカテゴリーを指す。下位には〈意図的解釈〉〈「居る」の再確認〉の2点が含まれる。〈意図的解釈〉は「居る」ことを意

図的に意味付け、自身に言い聞かせる行為、〈「居る」の再確認〉は自分が「居る」ことに関する元来からの意味を再確認する行為を指す。

〔場への行為〕は、場の維持に努めるカテゴリーを指す。下位に〈最低限の場の保持行為〉〈場の修正中止〉〈気遣い〉の3概念が含まれる。〈最低限の場の保持行為〉は場の現状維持、〈場の修正中止〉は理想の場に近づける行為の中止、〈気遣い〉は他者を気遣う行為を示す。

1.1.4 大カテゴリー【「居る」の代償】

【「居る」の代償】は「「居る」の代償」という一つのカテゴリーからなり、「居る」ことを意図的に実現させたことで生じる負の側面を指す。下位には〈負の感情〉〈疲れ〉〈振る舞いへの迷い〉の3概念が含まれる。〈負の感情〉はその場に「居る」ことで生じた申し訳なさや寂しさ、〈疲れ〉は居続けることで発生する疲労感、〈振る舞いへの迷い〉は振る舞い方が分からない、または分かっていてもそれが実行できないことを示す。

2. 補足分析

補足分析は、主分析で除外した他1名のデータを検討したものである。以下に主分析との差異に着目し結果を整理するが、本来であれば独立した別テーマとして分析可能であり、必要に応じて追加データを収集する過程が必要であるため、ここでの分析結果は理解を深めるための補足であることに留意する必要がある。主分析との差異はTable 2に示す。

Table 2
主分析結果の一覧と補足分析における抽出の有無

大カテゴリー名	カテゴリー名	概念名	補足分析での抽出
状態把握	場に対する状態把握	率直な違和	○
		場への不適応感	状況理解
		他者優位性の把握	他者不利性の把握
	自己状態把握	居づらい自分	○
		居づらくない自分	○
		離脱正当性の理解	×
選択	修正への検討	修正可能要素	○
		離脱力	×
		離脱リスク	○
	残留の選択	「居る」ことからの収穫	○
		居づらさの仕方なさ	〔状態否認〕 居づらさの克服
		期待の非現実性	×
「居る」への意図的没頭	自己への行為	他での居やすさ	×
		意図的解釈	○
		「居る」の再確認	○
	場への行為	最低限の場の保持行為	○
		場の修正中止	場の修正努力
		気遣い	○
「居る」の代償	「居る」の代償	負の感情	○
		疲れ	○
		振る舞いへの迷い	○

2.1 分析結果

補足分析の結果、大カテゴリー4個、カテゴリー9個、概念17個が生成された。大カテゴリー間の関係性は主分析と同一である (Fig.1)。一方、カテゴリーについては主分析における「状態容認」が抽出されず、反対に「状態否認」が抽出されている。また、概念については17個の概念のうち13個が主分析と同一である一方、補足分析独自の概念として「状況理解」「他者不利性の把握」「居づらさの克服」「場の修正努力」の4概念が抽出されている。これらは、それぞれ主分析における「場への不適応感」「他者優位性の把握」「居づらさの仕方なさ」「場の修正中止」と対になる。さらに、補足分析では主分析にて抽出された「離脱正当性の理解」「離脱力」「期待の非現実性」「他での居やすさ」が見られない。補足分析についても、【大カテゴリー】「カテゴリー」概念で示し、以下には補足分析独自の概念「状況理解」「他者不利性の把握」「居づらさの克服」「場の修正努力」について整理する。

2.2 補足分析独自の概念

「状況理解」「他者不利性の把握」は、【状態把握】における「場に対する状態把握」に分類される。「状況理解」は他者間の関係性や担うべき役割の把握を示し、「他者不利性の把握」は自分と他人の置かれた状況の差異を理解し、他者の悪状況を把握することを示す。

「居づらさの克服」は、【選択】における「状態否認」に分類される。「状態否認」は「居づらい」という経験を妥当としないことを示すカテゴリーである。また、これに含まれる「居づらさの克服」は、「居づらい」という経験の克服可能性への理解を示す。

「場の修正努力」は、【「居る」への意図的没頭】における「場への行為」に分類される。この概念は、理想の場に近づく努力やその場をより良くしようと実施される行為を指す。

V. 考察

1. 主分析から捉える「居づらい」という経験の発生過程

「居づらい」という経験の発生過程は、結果及び Fig.1 に示した通り、4つのカテゴリー【状態把握】【選択】【「居る」への意図的没頭】【「居る」の代償】によって説明される。

1.1 【状態把握】と「居づらい」という経験の始点

【状態把握】は、結果に示した通り現在自分が置かれている状況を整理する段階を指す。具体的には状況に対する解像度の高まりを示す段階であると推測する。

「居づらい」という経験の発生は、その場での率直な違和感である「率直な違和」を始点とし、その場にそぐわない感覚である「場への不適応感」が感知され、最終的に自己と他者の置かれた状況の差異を理解し、他者が好状況にあることを把握する「他者優位性の把握」に繋がると推測する。つまり、自身の置かれた状況への解像度が、時系列に沿って違和感から不適応感へ、不適応感から明瞭な状況の理解へと高まるのである。また、「他者優位性の把握」の精度は、居づらいと感じる自分を回想する「居づらい自分」、居づらいと感じない自分を回想する「居づらくない自分」が補足的に作用し高まると予測する。すなわち、「居づらい」という経験は、詰まるところ「他者優位性の把握」を起点として発生すると推測する。

また、「他者優位性の把握」は他者の好状況を把握する概念であり、概念成立には他者の存在が不可欠である。つまり、これは「居づらい」という経験がそれを経験をする者とそれ以外の他者との関係性を含むものであることを示唆している。よって、以降「居づらい」という経験をする者を経験者、居合わせる「居づらい」という経験をする者以外を他者と記す。

また、「他者優位性の把握」は他者の好状況を把握する概念であり、概念成立には他者の存在が不可欠である。つまり、これは「居づらい」という経験がそれを経験をする者とそれ以外の他者との関係性を含むものであることを示唆している。よって、以降「居づらい」という経験をする者を経験者、居合わせる「居づらい」という経験をする者以外を他者と記す。

1.2 「他者優位性の把握」と場の把握

ここで「他者優位性の把握」について詳細に示す。これは、第一に経験者自身、次いで他者の立ち位置を把握することで、場の二重構造を把握することであると推測する (Fig.2)。

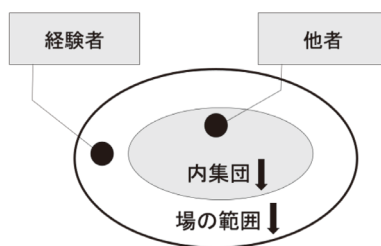


Fig.2
場の二重構造

まず、経験者の立ち位置について整理する。経験者は「居づらい」という経験において、場には含まれるがその中に存在する内集団には含まれない立ち位置を取ると推測する。

ここで場と集団について定義する。安田 (2024) は、場とは「ニハ (庭)」の短縮形として使われ始め、庭の語源から何かをするための、一定の限定された場所を指すと解説している。また、阪本 (2008, pp. 194-195) は先行研究を踏まえ、「場所」とは改めてその意味を問う必要もない了解されたものであるとしている。一方、集団について本間 (2011, pp. 3) は、メンバー相互に依存関係を持つことで関係を作る二人以上の個人の集まりのことを指すとしている。また狩野 (1985, pp. 139) は、

集団は集合性・関係性・形態性・安定性によって規定されると記している。さらに中でも内集団は、「自分が今まさに所属している集団」を指している（浦，2009，pp. 193）。これらに則れば，場とは何かをするための目的的枠組みであり，場の内部では目的共有がされているために，それをある程度推測可能であると言える。一方，集団は人的側面が強く，人間同士の関係性や凝集性が必要とされると言える。

議論に戻ると，経験者が場に含まれると認識する所以は，場が目的的枠組みであり，それを他者と共有可能であるためである。対して集団，ここでは特に他者らが形成した内集団に含まれないと認識する所以は，他者と関係性や凝集性の共有が不可能であるためとなる。

次いで，他者の立ち位置を整理する。他者は，「居づらい」という経験にて内集団に位置し，経験者と関係性や凝集性を共有している。また，これにより他者は内集団について経験者を含めて認識し，経験者を「居づらい」という経験をしない非経験者と認識する。さらにこれらの前提から，他者にとって場の範囲は内集団の範囲と一致することとなる。ただし，ここでの他者は経験者の認識上の他者であり，真に他者自身がその位置についているのかは定かではないことに留意する必要がある。

これらを統括すると，経験者は「居づらい」という経験をする時，自身の認識内で自身のみが「居づらい」という経験をする立ち位置にあることを理解する。これが〈他者優位性の把握〉であり，Fig.2のような場の二重構造が受容性の困難という様相を示すと考える。

1.3 【選択】と場の関係

【選択】は，【状態把握】を受け場に留まるか否かを思案する段階である。これは可能性を検討する段階を指し，「居る」を揺るがす，静止性の困難を反映していると推測する。

(a)【離脱への検討】と場の非強制性：【離脱への検討】は場からの離脱は可能であるという理解を示す〈離脱正当性の理解〉に影響を受け，離脱を肯定的に捉えることで実施される。ここで，離脱が肯定的に捉えられる理由として，場の非強制性が挙げられる。場は目的的枠組みではあるが，その目的の達成まで枠組みを外れることが許されないという強制性は有さないと推測され，いつでも居止めることが可能である。ゆえに，経験者は場からの離脱を検討する。しかし，実際には後述する【残留の選択】により，離脱にはリスクが伴うことが判明する。そのため【離脱への検討】は検討のみにとどまり，実行されないのである。

(b)【修正への検討】と場の共有性：【修正への検討】は想定する場に近づけるための外的要素の有無確認，またその実現性への思案を示す〈修正可能要素〉に影響を受け，実施される。しかし，場とはその目的性質から経

験者と他者の双方に共有されるものである。その上，他者にとっての場の範囲は内集団の範囲に等しく，同等に扱われるものである。つまり，場の内部に外的要素を取り入れ変化をもたらすことは，他者にとっての内集団の変化に繋がる。また，不快感が存在しながらも最低限身の安全性を保証している場を変化させることは，経験者にとっても危険を孕む。よって，【修正への検討】は検討のみにとどまるのである。

(c)【残留の選択】と場の閉塞性：【残留の選択】は，離脱を否定的に捉える側面と残留を肯定的に捉える側面から実施される。場とは目的的枠組みを指し，これは場の閉塞性とも言える。また，場には必ず居続けなければならない規定はない。しかし，場が閉塞性を有するために，離脱には場の敷居を跨ぐ行為が必須となる。そのため，離脱にはそれ相応の〈離脱力〉が発生する。また，仮に〈離脱力〉の上に離脱が実現したとしても，社会的立場の喪失や他者への負担を示す〈離脱リスク〉が発生し，経験者は場への残留を選択する。また，場の閉塞性は有意に働く場合もある。それが〈「居る」ことからの収穫〉のように，内部で限定的に獲得できるものがある場合である。この場合，場への残留が肯定的な意味合いで選択される。さらに，残留はリスクを冒さず利益を得る，ある種最適状態の選択とも言える。

(d)【状態容認】と場の他者前提性：【状態容認】は主に〈居づらさの仕方なさ〉によって説明され，この経験が発生する場の構造そのものから状況を認めざるを得ない場合を指す。ここで重要になる場の性質は，他者前提性である。この経験が発生する場は他者を前提とした構造を取り，場の二重構造は経験者本人のみでは変えようがなく，変化にはエネルギーが必要となる。このことから，期待した願いは叶わないことを〈期待の非現実性〉として認識し，〈他での居やすさ〉があるために状況を受け入れようと思ってしまうのである。さらに以上のことより，〈居づらさの仕方なさ〉〈期待の非現実性〉〈他での居やすさ〉から成る【状態容認】は，【離脱への検討】【修正への検討】【残留の選択】による検討を打ち消す力があると推測する。また，実際は【状態容認】成立時点で，【離脱への検討】【修正への検討】【残留の選択】は実行されず，場にとどまることが自動的に選択されると推測する。

1.4 【「居る」への意図的没頭】と場の均衡性

【「居る」への意図的没頭】における〈場への行為〉は，〈最低限の場の保持行為〉〈場の修正中止〉〈気遣い〉からなる。これらは場の保持に努めることを指し，場の均衡性が関係していると考えられる。均衡性について河合（1997，pp. 26）は，場とは，その内外については白黒的である一方で，一度内部に含まれてしまうと一様に灰色になると解説している。つまり，場ではそこでの状況が

全員にとって一律であることが重視される。そのため、場にとどまる場合には全員にとっての平穏を保つため、個人の突飛な行動は回避され、場の保持行動が取られる。また、場の共有性から他者にとっての場は内集団と範囲が等しい。すなわち、ここで経験者が注力する場の均衡とは、自身を含む場であると同時に他者にとっての内集団とも言えるのである。また、経験者は場の均衡保持のために、二重構造を有する場にとどまり続けなければならない。そこで、経験者自身が困難な状況に留まることを納得するため、〔自己への行為〕として〈意図的没頭〕（「居る」の再確認）を行うのである。

以上のことから、【「居る」への意図的没頭】は行為を志向するカテゴリーであると言える。よって、ここにdoingからの解放に関する困難が示されると推測する。

1.5 【「居る」の代償】と「居づらい」という経験の実感

【「居る」の代償】は〈負の感情〉〈疲れ〉〈振る舞いへの迷い〉の概念に見られるように、【「居る」への意図的没頭】を前提に、経験者に感覚として意識されるものである。つまり、【「居る」の代償】は「居づらい」という経験がその経験として認識されるための中核カテゴリーであると推測する。またこのことより、「居づらい」という経験は【状態把握】【選択】【「居る」への意図的没頭】を経た後、【「居る」の代償】を実感する経験であると推測する。

2. 「居づらい」にも関わらず居続ける特異性について

ここで、「居づらい」という経験がなぜ困難にとどまり続けてしまうのか、つまり「居づらい」という経験の中でとどまる行為はどのように描かれるのかについて検討する。

経験者は【「居る」の代償】に直面し「居づらい」という経験を実感した後、不快感回避のために再び【選択】を行う。続けて【選択】【「居る」への意図的没頭】へと過程が進むと、さらに【「居る」の代償】が発生する。つまり、「居づらい」という経験は大カテゴリーの循環によって継続的に発生すると推測される。この循環こそ、困難にとどまり続ける、すなわち「居づらい」という経験の中での「居る」という行為であると考えられる。また、この循環は「苦痛に耐えかね、席を外したままその場に戻らない」という現象のように【選択】における〔離脱への検討〕にて離脱が選択されれば、防止することができる。しかし、再び場に戻っていく現象が見られるように、〔状態容認〕によって残留が自動的に選択される。つまり、困難への繰り返しの直面はこの状況はやむを得ないとする〔状態容認〕によって発生すると言える。困難にとどまる行為は、その意味で消極的な意味を持ちつつ発現されるのである。

3. 補足分析との比較

Table 2に示す通り、主分析と補足分析の結果には共通点及び差異が存在する。その共通点と差異に着目し、「居づらい」という経験の発生過程と特異性についてさらに検討する。

3.1 主分析・補足分析の共通点

第一に、「居づらい」という経験の発生過程を示す大カテゴリーは、主分析・補足分析に共通する。特に、【「居る」の代償】についてはそのカテゴリーと概念の全てが一致する。また、【状態把握】【「居る」への意図的没頭】ではカテゴリーと概念の両者において差異が見られるが、概念名称が異なるのみでその内容は一致すると考えられる。この点を整理する。

補足分析における【状態把握】は、〔率直な違和〕を起点に、主分析における〈場への不適応感〕ではなく他者同士の関係性や他者間を取り持つ役割を認識する〈状況理解〉を引き起こす点で異なりを見せる。しかし、これらの概念は違和感から関係性の把握へと状況理解の解像度が高まる点で主分析と共通する。また、補足分析では〈他者不利性の把握〉として、第一に経験者自身が内集団に属すること、第二に他者は場には含まれるが内集団には含まれないことが把握される。つまり、この概念は主分析における〈他者優位性の把握〉と異なり、経験者は「居づらい」という経験をする必要のない立場に置かれる一方、他者は「居づらい」という経験をする立場に置かれることを認知することを指す。しかし、主分析における〈他者優位性の把握〉、補足分析における〈他者不利性の把握〉は、場の二重構造把握の観点からすれば内容が共通する。さらに、補足分析における経験者が「居づらい」という経験をする必要のない立場にあることから、補足分析における経験者は主分析における他者と立場が同一であると推測される。しかし、補足分析における経験者は、主分析における他者の立場にいなから〈他者不利性の把握〉として場の二重構造を把握する。つまり、補足分析における経験者と主分析における他者は立場は同一であっても、存在の仕方が異なる。よって、両分析において経験者が経験者たる所以は、場の二重構造の把握にあると推測できる。

また、補足分析における【「居る」への意図的没頭】では、主分析と同様に残留に伴い課せられる場の保持行為である〔場への行為〕、場にとどまることを納得するための行為である〔自己への行為〕が実行される。一方、主分析における他者にとっての内集団の均衡を保つ行為である〈場の修正中止〉が見られず、〈他者不利性の把握〉によって把握した「居づらい」という経験をする立場に置かれる者が内集団に属することができるように行われる〈場の修正努力〉が見られる点で異なる。しかし、両概念ともにその場が全員に均一であるよう調整する点

で共通する。つまり、場の保持行為も経験者が経験者たる所以であると言える。

以上のことより、両分析を通し「居づらい」という経験では、場の二重構造認知、場を保持する行為が共通し、これらを「居づらい」という経験の発生過程の必要条件と推測する。

3.2 主分析・補足分析の差異

一方、補足分析は【選択】にて主分析と大きな差異を認める。第一に、補足分析では〈離脱正当性の理解〉〈離脱力〉が見られず、補足分析における経験者は離脱を想定していない。これは補足分析における経験者が内集団に含まれることで他者と関係性や凝集性を有しており、〈他者不利性の把握〉において認識した「居づらい」という経験をする立場に置かれる者と比較し、優位な立場を取るためであると推測する。加えて、補足分析では「居づらい」という経験を克服可能とする〈居づらさの克服〉が抽出され、主分析における〔状態容認〕が不抽出である。これに関しても、補足分析における経験者の優位性が容認を喚起しないためであると推測する。さらに、補足分析では〔状態容認〕が存在しないことから、【選択】が確かに吟味されたものであると言える。またこれにより、補足分析における【状態把握】【選択】【「居る」への意図的没頭】【「居る」の代償】の循環は、〔状態容認〕によらず確かな【選択】によって発現することが予測される。つまり、「居づらい」にも関わらず居続けるという特異性は、その状況を容認する消極的な場合にのみ発現するものではなく、意思を持ったものとして発現する場合が存在するのである。

4. 今後の展望

本研究は「居づらい」という経験の全体像を捉えるために可能な限りデータを一括して扱ったが、経験内容に重なるの多い6名のデータは精緻な分類も可能であると予測する。特に、一時的な状況に関する語りか、あるいは所属するコミュニティに関する語りかという相異から、「居づらい」という経験の幅広い意味合いを読み取ることができる。よって、今後は経験内容をより精緻に分類し、「居づらい」という経験への解像度を高める必要がある。

一方、問題に示したように「居づらい」という経験の前提となる「居る」という行為には、動きの抑制や静的状態に価値を見出す心性が反映されている。これは行動・活動に大きな関心が向けられる英語と比較して、動かないことにプラスの意味が付与されている点で文化差として注目すべきとされている（やまだ, 2003, pp. 48-50）。本研究は特定の対象者・場面・期間を想定しない日常生活における「居づらい」という経験全般を想定す

る立場から検討を行っているが、日本文化の影響は念頭におくべきであると言える。

引用文献

- 浦 光博 (2009). セレクション社会心理学—25 排斥と受容の行動科学—社会と心が作り出す孤立—サイエンス社
- 狩野素朗 (1985). 個と集団の社会心理学 ナカニシヤ出版
- 河合隼雄 (1997). 母性社会日本の病理 講談社
- 北山 修 (2003). 自分の居場所—精神分析理論と臨床— 住田正樹・南 博文 (編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 (pp. 21-37) 九州大学出版
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- 計良真生・大森泉綺・大木桃代 (2022). 「居場所」と「居心地」の差異に関する検討 生活科学研究, 44, 21-31
- 阪本英二 (2008). 場所を現象学すること—生きるという方法— サトウタツヤ・南 博文 (編) 質的心理學講座3 社会と場所の経験 (pp. 185-207) 東京大学出版会
- 滝吉美知香・鈴木大輔・田中真理 (2017). 自閉スペクトラム症者における「気まずさ」の認識に関する探索的研究 発達心理学研究, 28 (2), 63-73.
- 則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達の变化 カウンセリング研究, 41 (1), 64-72
- 則定百合子 (2007). 青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会第49回大会発表論文集, 334
- 逸見敏郎 (2020). 「すること」と「居ること」をめぐる臨床心理学的考察—negative capabilityを手がかりに— 教職研究, 34, 155-166.
- 本間道子 (2011). セレクション社会心理学—26 集団行動の心理学—ダイナミックな社会関係のなかで—サイエンス社
- 安田朱里 (2025). 相談室の「場を整える」ことの臨床的意義 香川大学大学院医学系研究科臨床心理学専攻心理臨床相談室紀要, 4, 30-36
- やまだようこ (2003). 場所に居ることの身体イメージ—天地のあいだと「立つ」「坐る」「寝る」図像— 住田正樹・南 博文 (編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 (pp. 39-81) 九州大学出版